仮面ライダーゴースト
伝説！ライダーの魂
平成一期編

零六五五

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タケルとマコトとアランが歴代仮面ライダーの心を知り、魂を受け継ぎ、レジェンドライダーゴー－ストチェンジ！

の平成一期編。

※ライダー同士のコラボがメインとなっております。

目次

第八章　カブト編　1
特別章　G編　6
第九章　クウガ編　12
第十章　キバ編　22

第八章　カブト編

アランはその路地を歩いていた。
そしてその隣にはカノンがいる。アラン様～といいながらくっついてくる彼女は彼にとって正直鬱陶しいものだっただ。
「カノン、これ以上私につきまとうな。マコトの所に行ったらどうだ。」
「アラン様、言ったじゃありませんか。お兄ちゃんはいま仮面ライダーの眼魂探しで忙しいんです。私が邪魔しちゃ悪いし。」
「私の邪魔はしていいということか！」
「そ、そういう訳じゃ…。」
そこまで言ったところでアランは気が付いた、木の陰から迫っていたその怪人に。グリラスワーム、薄緑と青の配色、そして何よりも目立つのがその虫のような造形だった。一目で分かる程に異常だ。そいつは今こちらに向かってきている。敵意があるのは明かだった。
「カノン、下がっていろ。」
そういいながらアランは眼魂のスイッチを押し、メガウルオウダーにセットする。

『ＳＴＡＮＤ　ＢＹ』『ＹＥＳ　ＳＩＲ』『ＬＯＡＤＩＮＧ』
「変身。」
『ＴＥＮＧＡＮ　ＮＥＣＲＯＭ　』『ＭＥＧＡＵＲＵＯＤ』『ＣＲＡＳＨ　ＴＨＥ　ＩＮＶＡＤＥＲ』
ネクロムへと変身したアランは一気に距離を詰めてグリラスワームへと攻撃を行う。拳を次々に叩き込むがいずれも避けられるか止められるかしてダメージは与えられない。
それまで守勢だったグリラスワームは拳でネクロムをはじき飛ばした後、両肩から鉤の様な触手を伸ばす。二本の触手はネクロムへと突き刺さり、空中へ浮かせた。
「馬鹿な…!!」
「アラン様!」
そこで初めてそのワームは口を開いた。
「ふん、マスクドライダーだがなんだが知らんが弱い、弱すぎる。完璧には程遠い!」
「!?」
その言葉にアランは心を打たれた様に顔を上げる。だがグリラスワームは無慈悲にもゆっくりとネクロムへと近づきとどめを刺そうとしていた。
「人間は変われない。不完全だからこそ人類全てをネイティブにするのだ!それこそが

完璧なる世界なのだ！」
「違う、誰かに存在を上書きされて完璧になどならない！」
「私たちは完璧な世界を夢見る。自分の心で、誰かのために自分を変えることが出来るのが私たちだ!!私がスペクターやカノンのために変われたように！」

その言葉に呼応するように空中から赤い物体が飛来する。それは触手を断ち切りネクロムの前で静止した。それは紛れもなく、『カブトセクター』であった。
「私に力を貸すというのか、いいだろう。」
紋章を描くとカブトゼクターはパーカーへと変化する。そして空中で一度右手を天を刺すようなポーズをした後、メガウルオウダーに吸収される。

そしてアランに握られていたのはカブト眼魂だった。スイッチを押すと『０７』と表示された後メガウルオウダーにセットそしてスイッチを
『ＴＥＮＧＡＮ』『ＫＡＢＵＴＯ』
白い素体に赤く光るカブトのパーカー。
ネクロムはグリラスワームに近付き、拳を叩き込む。先ほどまでとは違う。互角に、

いやそれ以上に戦えている。
「一気に決めてやろう。」
　ユニットを起こしもう一度ボタンを押す。
『ＤＡＩＴＮＥＧＡＮ』『ＫＡＢＵＴＯ』『ＣＨＡＮＧＥ　ＢＥＥＴＬＥ』
　ネクロムはメガウルオウダーから出現したクナイガンを握る。そして右腰を叩く。
『ＣＬＯＣＫ　ＵＰ』
　その世界ではネクロムだけが通常のスピードで動けた、後ろで隠れているカノンもグリラスワームも全てが低速になった世界。そこで無防備となった敵に一撃二撃三撃。
「ネクロムゥウ――――ッ!!」
『ＣＬＯＣＫ　ＯＶＥＲ』
「お前は変われたのか…。私は……。」
　断末魔と共にその身体は爆散した。
　カノンが呆然とした表情で回りを見渡している。アランは変身を解除してカノンの元へと戻る。
「ねえ、アラン様。さっきの言葉、私やお兄ちゃんのために変わったってどういうことですか?」
　ビックリしたようにしたあと、カノンから顔を背けるアラン。

「教えてくださいよ！たこ焼き買ってあげますから！」
「なんだと…。いや、食べ物で私を釣れると思うな!!」
「フミ婆は言ってました。食べ物の恨みは一生の恨み。そして食べ物の恩は一生の恩と！」
「だからどうした。私に恩を感じろと言うのか！」
「違いますよ。食べ物は大事にしないとねって。」
「なら父上も言っていたぞ。人間が争い始めたのは食料が安定し初めてからだ。人間の争いは食料によって引き起こされているとな。」
「そんな…。」
「…。だがたこ焼きは良い物だ。食べ物は人を幸せにする力を持っている。」
「それも大帝様が仰ったんですか？」
　アランはカノンの方へ向き直し、笑顔でこう言った。
「いや私の言葉だ。」

特別章　G編

河川敷に寝転がって小さくため息をつく。天空寺タケルを悩ませているのは彼が持つ眼魂だ。

懐からそれを取り出す。レジェンドライダー眼魂。番号は『１６』、ドライブ眼魂。

「死んだ英雄の魂が英雄眼魂なんだよな？まさか泊さんが・・・そんなわけないか。」

その背後に一人の影が忍び寄る。足音に気付きタケルは咄嗟に振り返った。

「はっ！」

流れる風のような髪に鋭いナイフのような目、眼魔世界の王子・アランだ。

「天空寺タケル、こんな所で何をしている。」

「なんだ、アランか。ビックリさせるなよな。」

「貴様が勝手に驚いているだけだろう。」

そういいアランはタケルの隣に同じように座り込む。タケルはちょっと驚いたように顔をしかめた後にアランに問いかける。

「それより、俺になにか用事か？」

「あぁ、貴様らが探しているライダー眼魂とやら。一つ見つけてやったぞ。」

「本当か！やっぱりまだ残っているのかライダーの魂は・・・。」
ゆっくりとタケルが立ち上がった時、アランは追いかけるように立ち上がりタケルを突き飛ばす。
「危ない！」

二人のすぐ至近距離を影が通り過ぎる。奇襲が失敗したと悟ったそいつは振り返って二人を見る。
「見つけたぞ。仮面ライダーゴースト・・・！」
胸に付いた髑髏、アブラムシのような造形、フィロキラセワーム、その怪人の名前だ。
「貴様、先ほどの奴の仲間か、いいだろう。私が相手をしてやる。」
アランは懐から眼魂を取り出し眼魂を起動させる。ナンバーは『０７』
「変身。」
落ち着き払った声でそういい、メガウルオウダーのスイッチを押す。
『ＴＥＮＧＡＮ』『ＫＡＢＵＴＯ』
「俺も行こう！」
タケルは手元にあった眼魂を押す。ナンバーは『１６』

『アーイ?·バッチリミナー!·バッチリミナー!』『カイガン!·ドライブ』『警官、正義感、タイヤ交換!』

赤いパーカーを纏った二人のライダーはワームと格闘を繰り広げる。二対一にも関わらず相手は怯むどころか逆に圧倒する勢いだ。

右手にゴーストを、左手にネクロムを、それぞれ左右に投げとばす。

「貴様ら仮面ライダーのせいで徳川清山も岡村敬助も死んだ。愛する物だとか、大切な相棒だとか、そんな物は偉大なる革命の前ではちっぽけな存在でしかない。なぜそれが分からない?·分かろうとしない?」

「そうかお前はあの時の・・・!」

ハンドル剣を杖にゴーストは立ち上がる。

「お前達の理想のために、誰かの大切な物が傷つけられるなんて間違ってる!俺達はいつだって忘れられない笑顔の為に戦うんだ!」

その時彼の前に一本のワイン瓶が飛来する。ゴーストはそれに紋章を描くと、出現するパーカー。

右手を腰に当て左手を高く掲げる。そしてゴーストドライバーに吸収されその姿を眼魂にとどめる。
黒を基調に赤が加えられた配色、そしてボタンを押して浮かび上がる文字は『G』
「Gか、なんだか親近感が湧くな!」
そしてそれをドライバーにセットし、レーバーを引いて、
『アーイ、バッチリミナー!』
押す。
『カイガン!G』『ベルトにワイン、Gのサイン!』
「今、僕のヴィンテージが芳醇の時を迎える!!」
「貴様、何を言っている・・・?」
「いや、また勝手に。」
それを見たフィロキラセワームは満足げに首を傾けて言い放つ。
「良いだろう。プレイボールだ。」
ゴーストとフィロキラセワームは距離を詰めて、その身をぶつけ合う。振り返ってゴーストはドライバーから武器を取り出す。
『ソムリエソードG!!』

両刃の剣をワームの身体に当てて、斬る。怯んだ所にクナイガンの援護射撃がネクロムから飛ぶ。
「決めるぞ、アラン！」
『ダイカイガン　G　オメガスワリング！』
『DAITNEGAN』『KABUTO』『ONE　TWO　THREE』
ゴーストはベルトを通し、その右足にエネルギーを貯める。ネクロムは右手からその角に光を流す。
「スワリング」「ライダー」「キック!!」
二人の蹴りを受けてフィロキラセワームは数メートル吹き飛ぶ。ボロボロの身体でまだ立ち上がらんとするがそれは叶わなかった。
「まだ、終わってねぇぞ!!!!」
『オヤスミー』
ベルトから眼魂を取り出して二人は変身解除。タケルはアランのほうを向いて言った。
「この世界を守れるのは俺達、仮面ライダーだけなんだ。行こう、アラン。」

「そうか私も・・・仮面ライダーなのだな。」

「うん。そしてもう一度・・・」

第九章　クウガ編

大天空寺の地下、モノリスの研究室。そこに置かれたパソコンの前に天空寺タケルは居た。

パソコンに映し出された数式を見つめている。そしてぼそりと呟いた。

「ぜんっぜん、わかんねぇ・・・。」

アカリがまとめてあるとは言っていたが、それがタケルにとって理解出来るものでは無かった。ため息をついて頭を抱えた時、どたどたと足音が部屋に近付く。それが叫ぶ声はとても聞き覚えのあるものだった。

「タケル殿オオオオオオオオ。不可思議事件どころではなく重大事件ですぞ！」

とても見覚えのある御成だった。

「どうしたんだよ、御成。落ち着いて。」

「落ち着く場合ではないのです！町で怪物が大量殺戮を・・・。とてつもない数の犠牲者が！」

「なんだって、眼魔じゃないのか!?」

「普通の人にも見えているようです。このままでは町が滅びかねませぬぞ。」

「わかった、すぐに行く！マコト兄ちゃんとアランにも連絡を。」
「お任せ下さい。」
あわあわと再び階段を駆け上る。それにタケルも続いて寺を飛び出した。

そこいたのは全身が白と金の怪物だった。ゆっくりとこちらに近付いている。通ったその道は全て、
地獄と化していた。もう動かない人々、倒れたビル、剥き出しの道路。すべてが炎につつまれて、それはまさしく闇だった。
「お前・・・なんてことを！」
「足りないよ・・・、究極の闇にはまだ全然足りない。」
「許さない・・・。命をなんだと思ってるんだ！」
そこにマコトとアランが到着する。その光景に二人は驚愕で固まってしまう。三人が見た今まで最大の悲惨な光景だった。
「よくも、この美しい世界を・・・。行くぞ、マコト、タケル！」
アランの掛け声で三人が眼魂をとりだし、この世界の仮面ライダーによる変身が始

まった。

『ＤＩＶＥ　ＴＯ　ＤＥＥＰ』　『一発闘魂！』

『ＳＴＡＮＤ　ＢＹ』

『ギロットミロー！』　『バッチリミナー！』　『ＹＥＳ　ＳＩＲ　ＬＯＡＤＩＮＧ』

『ゲンカイガン！Ｄスペクター！』『カイガン！ブースト！』『ＴＥＮＧＡＮ　ＮＥＣＲＯＭ　』

『激昂、覚悟、』　『俺がブースト、』　『ＣＲＡＳＨ　ＴＨＥ　』

『ギザギザゴースト！』　『奮い立つゴースト！』　『ＩＮＶＡＤＥＲ』

三人のライダーが一斉にン・ダグバ・ゼバに攻撃を仕掛ける。それをみたをいつは嬉しそうに肩を振るわせ

こういった。

「君達はこの世界の戦士（ライダー）なんだ。じゃあ、もっと僕を笑顔にしてよ。」

ゴーストはサングラスラッシャーを水平に振りかざすが、ダグバの右手に触れたとたん、ぐにゃりと形状が曲がり、吹き飛ばされる。

ネクロムとディープスペクターの同時攻撃にも対応し、二人のライダーを右へ左へと

はじき飛ばす。

圧倒的な力。ダグバはその身体能力だけで三人のライダーの合算を上回っていた。

それに対しタケルが感じるのは勝てないという実感だけだった。だが此処で下がるわけには行かない。自分たちはこの世界を守るライダーなのだ。

「みんな、行くぞ！」

それぞれが必殺技の紋章をだして一斉にキックを決める。だが三本の足は同時に止められ、地面に何度も叩きつけられる。シメで炎の中へ投げ込まれ三人は強制変身解除。

その時タケルは確かに頭にビジョンが浮かんでいた。それはダグバの記憶。吹雪の中で1人の男と殴り合いを続ける記憶。その記憶だけが鮮明に頭に焼き付いた。

「この世界にもあるよ。もう一つの究極の闇。アークル。頑張って見つけてね。僕は待っているから、あの場所で。」

そう言って人間体になったダグバは再び闇へと姿を消した。

―大天空寺

雨が降っていた。上がる湿度と共にそこに集まった全員にかつて無いほどに重苦しい雰囲気が漂っていた。現在の最高戦力を持ってしても倒せるどころか傷一つ付かない相手、ン・ダグバ・ゼバ。

タケルはぼそりと呟いた。

「行くしかない、あいつが居る所に。」

「タケル殿、行けませぬ。今言っても勝つことはできません。それどころか・・・。」

「それでも!」

ゆっくりと頭を上げたマコトが口を開く。

「だが、タケル。奴の居場所が分かるのか?」

「あぁ、九郎ヶ岳遺跡。あいつのの記憶を見たんだ。」

「勝つ見込みはあるのか。」

「あいつが言ってたアークルという物があればそれが鍵になるはずなんだ。」

アランは立ち上がり、タケルの方を向いて言った。

「私はすぐにそこに向かうのは反対だ。現時点ではそのアークルとやらがどこにあるのかも分からない。そもそもそれが何かすら分かって居ない。むやみに行動するのは危険だ。」

「じゃあ、このまま黙って見てろって言うのか!」

「タケル殿、一度落ち着いて下さい。無謀と勇気は違う物ですぞ。」
「私もそこに行くのは反対よ。タケルだけが危険な目にあって良いなんておかしいわよ。策をちゃんと練っていかないと。」
御成とアカリもそう言う。でもタケルはあの光景を思い出していた。ダグバの記憶にあった1人の青年。涙を流し、その青年はダグバと戦っていた。血を吐きそれでも立ち上がっていた。
タケルは決意する。例えそれが無謀でも自分は戦わなくてはならない。あの人のように。命を燃やしきった英雄達のように。
「でも、俺はみんなの笑顔を守りたい！その為に俺は俺の命を燃やしたいんだ！」
天空寺の外に雨音に被せた轟音が突如、響く。そして何かが落下したように地面が揺れた。
「今度は何事!?」
慌てふためく御成をよそにタケルは急いで外へと出る。そこに止まっていたのは
「巨大な・・・クワガタ?」
横幅が二メートルはあるだろう巨大なクワガタ。そしてその先端には石で作られたベルトが置かれてあった。
「まさか・・・。」

ドライバーを出してその石のベルトに紋章を描く。そこから生まれたのは赤い戦士のパーカー。空中で左手を腰に起き、右手を左に突き出したポーズを取った後、ドライバーに吸収されて眼魂へと変化する。
「新しいライダー眼魂だ。じゃあ今のがアークル・・・。」
クウガの眼魂。それを握りタケルはみんなの前に立つ。
「今から九郎ヶ岳遺跡に行ってくる。」
御成は一歩前にでてタケルに言った。
「拙僧も付いて行きます。」
「いや、御成はここで」
遮るように御成は叫んだ。
「拙僧は！タケル殿を見ていることしか出来ませぬ。ですからタケル殿を見と届けます。」
微笑するようにタケルは俯いた。
「・・・わかった。ありがとう、御成。」
２人は歩き出した。だがアカリは２人に向かってこう言った。
「タケル！必ず帰って来てね。」

「もちろんだよ、アカリ。」

「寺の鍵、開け解くからね。」

―九郎ヶ岳遺跡

そこには雪が降っていた。２人はバイクを降りて、向かい合う。

「タケル殿、お気を付けて。最後まで見ていますから」

「分かった。・・・じゃあ、見ててくれ。俺の変身。」

眼魂のスイッチを押す。番号は「０１」。

雪に音が消され、そこにはただドライバーの音声だけが響いていた。カバーを開いてそこに金色の眼魂を入れ込む。レバーを引いた。

『アーイ　バッチリミナー!・』

そして押し込んだ。

『カイガン!・クウガ!超変身!・変わる全身!・』

変身し終えたゴーストは一度御成の方を向いて、走り出した。
全てが白景色の中でぽつりと立つン・ダグバ・ゼバ。
「なれたんだね。君も戦士に」
始まる戦い。ゆっくりと近付いてお互いが拳を振るう。拳が当たる度にタグバから血が飛ぶ。タケルは血を流さなかった。その身体に、もう血など流れて居ないからだ。だから、その流れる血の大切さを知っている。
ドライバーのレバーをもう一度引いて押す。一度距離を取って構えを取る。そして一歩、二歩、三歩。その右足に炎の力を貯める。そして飛び上がりながら右足を一気に突き出した。
「おうりゃあああああああ!!!!!」
タケルの叫び声と共にダグバのベルトに一撃を加える。バックルが割れて身体の中から光が溢れ、巨大な爆発が起きる。それはゴーストの至近距離。
雪が止んだ。
「タケル殿ぉぉぉぉおおおおおおお!!!!!!!!」

ゴーストはその爆風に巻き込まれて強制変身解除となる。だが爆炎の中で確かにクウガ眼魂を掴んだ。

その瞬間、赤い影がタケルを連れその爆炎の中を脱出した。そしてその影に飛ばされ雪の上にタケルは投げ出された。そこに御成が近寄る。

その爆風が雲を吹き飛ばしたのだろうか。そこには青い、どこまでも広がる青空が広がっていた。

そしてタケルは立ち上がって、振り返る。そこには1人の青年がいた。もう離れた距離を歩いているその青年にタケルが声を掛けようと手を伸ばした時、青年は確かに、

その右手親指を空に突き上げていた。

古代ローマで納得できる行動をした人間に送られる称号。

タケルは静かにそのポーズを笑いながら、真似た。

第十章　キバ編

私の名前はアラン。眼魔世界の王子である私は、人間の少女に導かれ、この世界の宝物を見つけた。それを守るために仮面ライダーネクロムとなって眼魔達と戦っている。

私は今、不思議な少女に「仮面ライダーの眼魂を集めて欲しい」と頼まれた。私たちが持っている眼魂は９個。

―大天空寺

御成に肩を借りる形でタケルが寺の中に運び込まれる。アカリが真っ先に駆けだした。

「タケル・・・！」

「ただいま、アカリ」

そうして、椅子に座ったタケルは周りを見渡して、ある以上に気付いた。

「あれ、アランとナリタはどこにいったんだ？」

「あいつらなら、外に出かけている。なんでもゲート付近で異常があったらしい」

マコトがそれに受け答える。

「大丈夫だろうか・・・」

―ゲート付近

鋭い眼光でアランは周囲を探る。異常があったのはこの辺りの筈だ。だが、おかしい・・・。なぜ人一人いない？

「やっぱり、何かの間違いだったんじゃないですかね？」

軽い調子でナリタが言ってくるが、あきれたようにアランが返した。

「それで、何かの間違いでは無かった時に、お前はどうするつもりだ？なんでも軽い考えで挑むのは止めた方が良い」

「す、すいません・・・。ん？・・・・・・あ、あれ！アランさん。アレを！」

ナリタが必死に指刺す先を凝視する。・・・あれは。蝙蝠？それに気付いた瞬間にその場を飛び立ち、こちらに向かってくる。赤い身体に黄色の目、かなり機械的な蝙蝠だった。

「ほう・・・？貴様らが『あいつ』が言っていた奴か。面白い！」

ドスのきいた声で、しゃべり出した蝙蝠そのまま、道路の端へ寄る。そうした時にアランは気が付いた。こちらに一人の男が近付いていることを。

「来い・・・ッ!!」

その男はキバットバットⅡ世を左手に噛ませる。
「ガブリッ」
禍々しい待機音と共に鎖で巻かれたベルトにキバットバットⅡ世を装着させた。
「変身」
この姿こそが闇の鎧・ダークキバ。そして、そのキバは高々に叫んだ。
「喜べ、貴様ら眼魔一族の・・・絶滅タイムだッ!!」

「下がっていろ」
アランはそう言いながら、ナリタを下げてメガウルオウダーを取り出す。
『ＳＴＡＮＤ　ＢＹ』『ＹＥＳ　ＳＩＲ』『ＬＯＡＤＩＮＧ』
「変身」
『ＴＥＮＧＡＮ　ＮＥＣＲＯＭ　』『ＭＥＧＡＵＲＵＯＤ』『ＣＲＡＳＨ　ＴＨＥ　ＩＮＶＡＤＥＲ』

白のライダーと黒のライダーが激突する。互いが互いに拳を叩き込むが、ダークキバの方が圧倒的に早く、ネクロムは吹き飛ばされた。
「こいつ・・・強い!」

「貴様の判決を言い渡そう。『死』だ」
そう言いながらダークキバは深緑の紋章を空間に召喚する。指を鳴らして、それをネクロムの落下地点に設置した。
「うわああぁ!!」
赤い電撃が走る。それに吹き飛ばされるがその行き着く先はダークキバの蹴りだった。蹴り、電撃、蹴り、電撃。繰り返される攻撃、アランは蹴りで紋章まで飛ばされる空中の中で懐から眼魂を取り出す。
「させるかッ!」
紋章をたぐり寄せるようにして、ネクロムに当てる。そのダメージで眼魂を落としてしまった。
「そんな小細工がこの俺に通用すると思うのか?」

そこで物陰からナリタは気付く、今自分はアランを救う術があるのでは?なにか出来るのでは?
自分にはタケル達のように戦うは出来ない。だが、それでも、と思う気持ちが確かに彼の中にはあった。
物陰から飛び出してナリタは駆ける。一直線に落ちた眼魂へと手を伸ばし、つかみ取

る。
「僕だって、弱い僕と戦う事が出来る!」
寸での所でダークキバの電撃を交わして、それをネクロムへと投げる。眼魂のスイッチを押す。番号は『１４』
『ＴＥＮＧＡＮ　ＧＲＩＭＭ』『ＭＥＧＡＵＲＵＯＤ』『ＦＩＮＧＨＴＩＮＧ　ＰＥＮ』
肩からニブショルダーを出して、そのループから離脱する。そして、地面へと降り立った。
「ナリタ、感謝する。お前は軽いだけでは無いようだな」
「へへっ、当たり前ですよ」
「お前は、何故そこまでして戦う?何のために戦う?お前の祈りは何だ?」
ダークキバがそう呟いた。アランの中に答えがある。それが今、音楽のようにその場に響き渡った。
「私は父上が目指した、人も眼魔も、全てのものが幸せになる世界を作りたい。そして私はそのために人々の心の中にある宝物(音楽)を、を繋ぐために戦う!!」
ダークキバが笑う様に首を傾ける。そして、ネクロムの元にウェイクアップフエッス

ルが飛来する。そしてそこから、キバ眼魂が生まれる。鎖を解き放つ様に、運命から目覚めるように。

眼魂のスイッチを押す。番号は『９』。

『ＴＮＥＧＡＮ』『ＫＩＶＡ』『ＢＲＥＡＫ　ＴＨＥ　ＣＨＡＩＮ』

ダークキバの元にネクロムが駆け寄り、腹部に拳を叩き込む、連発し何度も何度も。最後の一撃で突き放し、メガウルオウダー立てる

『ＤＡＩＴＮＥＧＡＮ』『ＫＩＶＡ』『ＷＡＫＥ　ＵＰ』

周囲が闇に包まれ、夜になる。眼魂の魔皇石から左手にエネルギーが集中する。

「たあぁぁッ――――ッ!!」

ダークキバに一撃が決まる。ダメージ受けたのか、変身が解除された。相当苦しそうに足を引きずっている。

「ちゃんと、あいつの魂を受け継げている・・・。これなら・・・」

「待て! お前は何者なのだ!」

「お前、この俺を知らないのか。１０００年に一度の天才の名だ。覚えておけ」

「俺は紅音也だ」